

# 横浜市インフルエンザ流行情報 8号

横浜市衛生研究所 / 横浜市健康福祉局健康安全課

## 《トピックス》

### B型の報告の割合が、さらに増えています。

#### 【概況】

横浜市全体の2018年第2週(1月8日～14日)の定点<sup>※1</sup>あたりの患者報告数は、流行注意報が発令された第51週の14.19<sup>※2</sup>、第52週の16.67<sup>※2</sup>から増加して、**22.87**となりました。

年齢別では、第2週で15歳未満の報告が全体の54.8%となっており、最近5週分では15歳未満の報告は減少傾向、成人の報告は増加傾向にあります。

学級閉鎖等は、第2週は小学校1件と中学校1件でしたが、第3週(1月15日～21日)は17日時点で既に小学校を中心に100施設以上(患者数1,300人以上)の報告があり、急増しています。保育園での集団発生の報告も増えており、お子さんがいるご家庭での感染予防が重要です。

また、病院や高齢者施設等での集団発生の報告も続いています。各施設での持ち込み防止や感染拡大防止対策を徹底しましょう。

迅速診断キットの結果は、第2週では **A型 40.6%**、**B型 59.2%**と、さらにB型が報告される割合が増えています。

インフルエンザの本格的な流行期に入ったため、正しい手洗い<sup>※3</sup>等の予防、咳が出る時のマスクの着用及び早期受診などの対策<sup>※4</sup>が重要です。

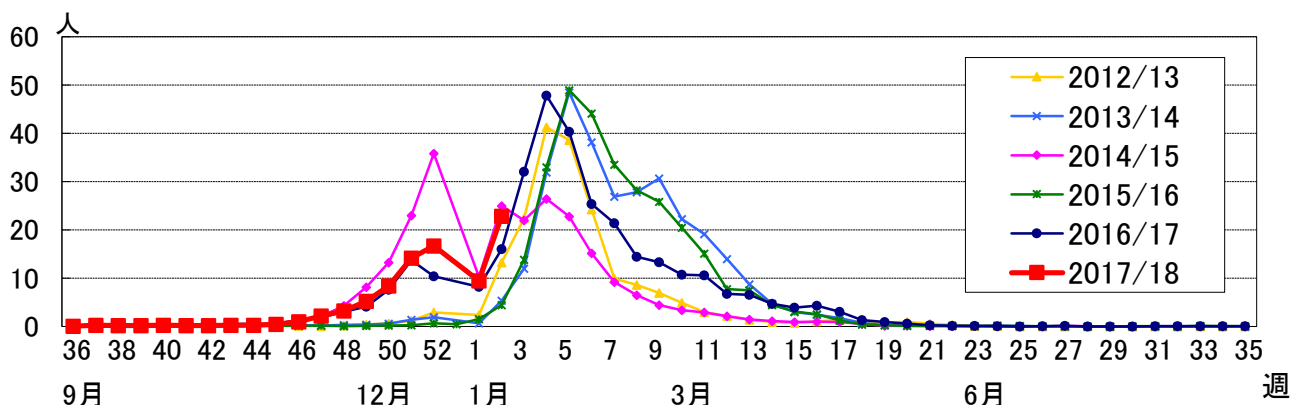
※1 定点とは、定期的にインフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内153か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

※2 追加報告があったため、以前お知らせした情報から報告数が更新されています。

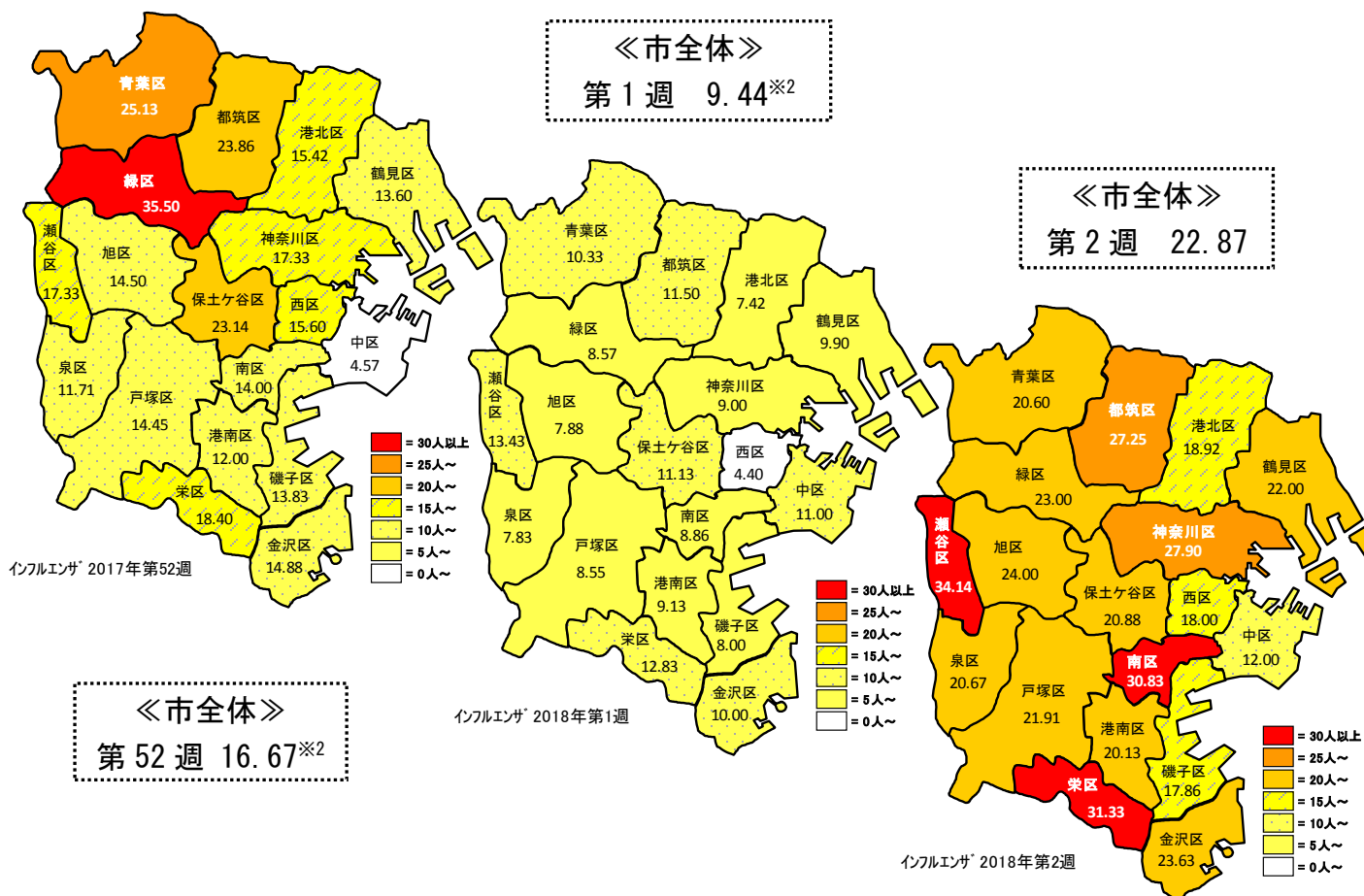
※3 [横浜市保健所ホームページ](#)(「正しい手洗い方法」および、掲示用ポスター「石けんで『手』を洗おう」をトップページに掲載しておりますので、是非ご活用ください)

※4 [市民向けインフルエンザ予防チラシ\(横浜市\)](#)

**1 市内流行状況:**市全体の定点あたりの患者報告数は、流行注意報(基準値:10.00)が発令された第51週の14.19<sup>※2</sup>、第52週(2017年12月25日～31日)の16.67<sup>※2</sup>から、第2週(2018年1月8日～14日)では22.87と増加しています。



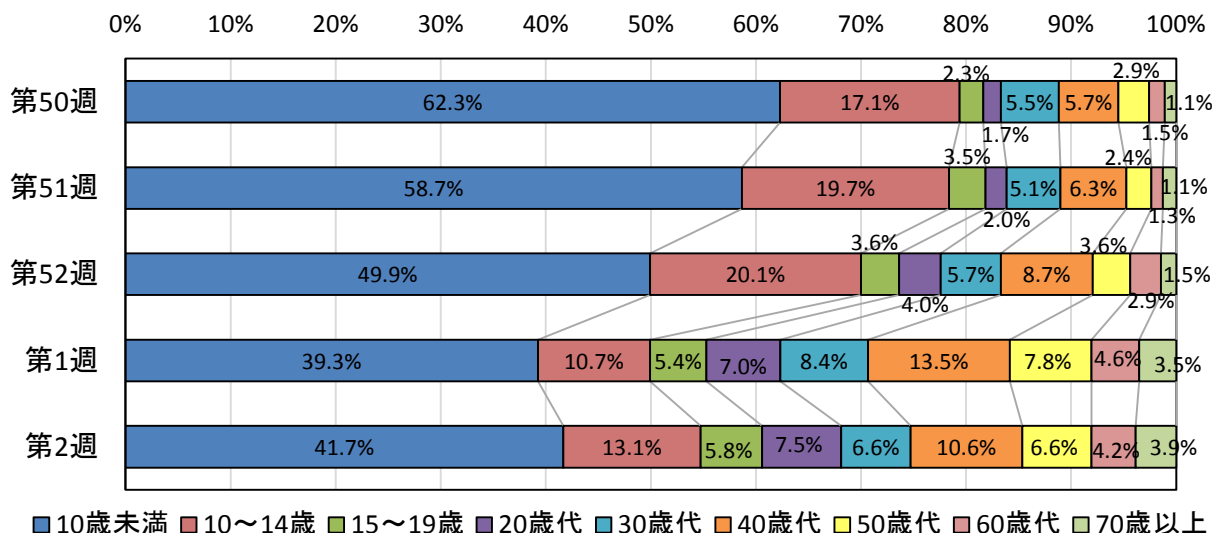
## 2 地図で表した直近3週間の区別流行状況(塗り分けの数字は定点あたり報告数)



第51週にて、市内全体で定点あたり10.00を超えたため、流行注意報が発令されています。  
 市全体で定点あたり30.00を超えると、流行警報が発令されます。昨シーズンは第3週(平成29年1月16日～22日、定点あたり32.07)で発令されています。

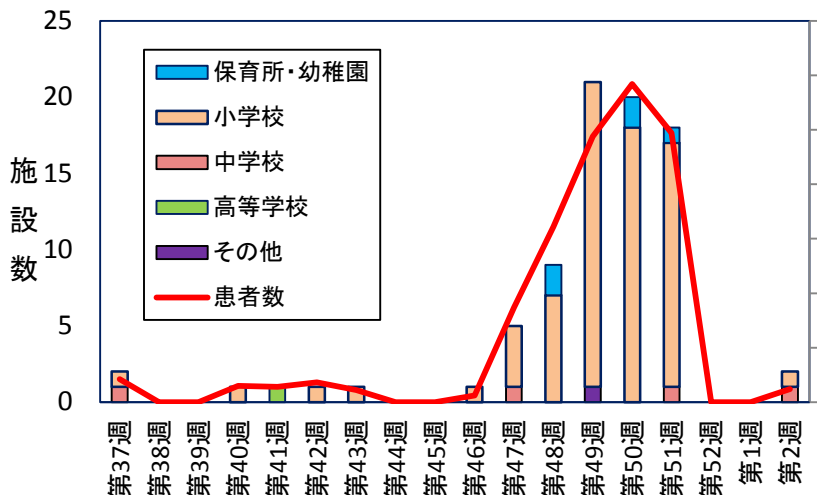
**3 年齢層別集計:**第2週の患者年齢構成は、10歳未満が全体の41.7%、10歳以上15歳未満が全体の13.1%を占めており、15歳未満が全体の54.8%を占めています。また、60歳以上は全体の8.0%となっています。最近の5週間でも、経過とともに、15歳未満の占める割合が減少し、成人の占める割合が増えています。

年齢層別患者割合

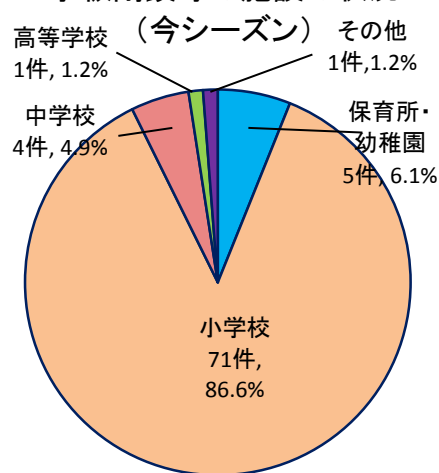


**4 市内学級閉鎖等状況:**授業が開始された第2週は小学校1件と中学校1件のみでしたが、第3週(1月15日~21日)は、17日時点で既に小学校を中心に100施設以上(患者数1,300人以上)の学級閉鎖等の報告があり、急激に増加しています(第3週の学級閉鎖等の件数および患者数は、次号に掲載します)。今シーズンの第2週までの報告は累計82件、患者数は延べ1,128人となっています。報告された施設の割合は、保育所・幼稚園6.1%、小学校86.6%、中学校4.9%、高等学校1.2%、その他1.2%となっています。

学級閉鎖等の施設数と患者数の推移



学級閉鎖等の施設の状況 (今シーズン)

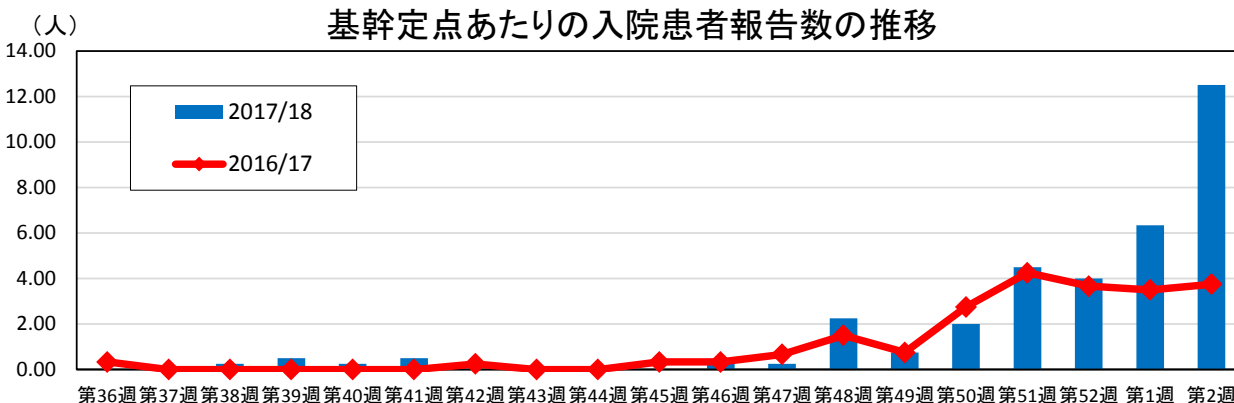


**5 入院サーベイランス:**市内基幹定点医療機関<sup>※5</sup>におけるインフルエンザ入院患者は、第2週は25人の報告があり、累計98人<sup>※2</sup>となりました。うち、15歳未満が27人、60歳以上が55人となっており、小児と高齢者の報告が多くなっています。

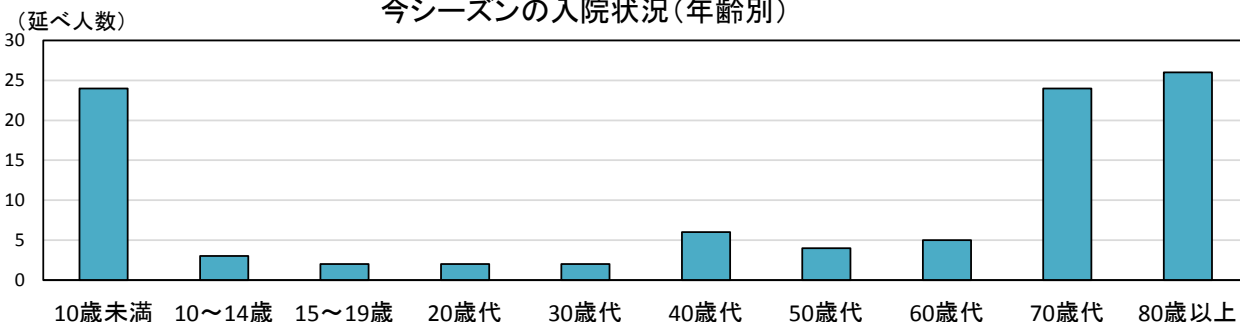
入院時の診療内容が把握されている事例で、ICU入室、人工呼吸器の使用、頭部CT検査、脳波検査等が実施された重症肺炎やインフルエンザ脳症が疑われる入院患者は、第2週では2人の報告がありました。

※5 基幹定点:患者を300人以上収容する病院(小児科医療と内科医療を提供しているもの)の中から、地域ごとに指定された医療機関のことで、市内には4つの基幹定点があります。

基幹定点あたりの入院患者報告数の推移

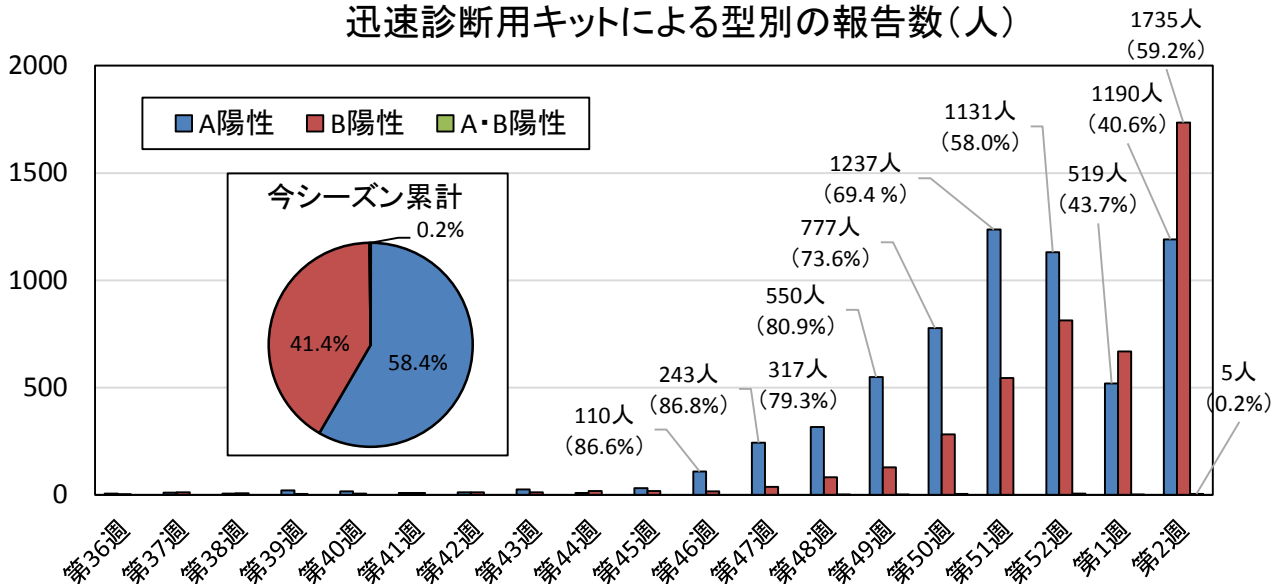


今シーズンの入院状況(年齢別)



**6 迅速キット結果:**これまでの経過ではA型が多く報告されてきましたが、第50週頃よりB型の割合が増え始め、第1週の迅速キットの結果では、A型43.7%、B型56.2%、A・B型ともに陽性0.2%と、B型がA型を上回り、第2週の迅速キットの結果では、A型40.6%、B型59.2%、A・B型ともに陽性0.2%と、B型の割合がさらに増加しています。今シーズン累計では、A型58.4%、B型41.6%、A・B型ともに陽性0.2%となっています。

横浜市の患者定点医療機関における  
迅速診断用キットによる型別の報告数(人)



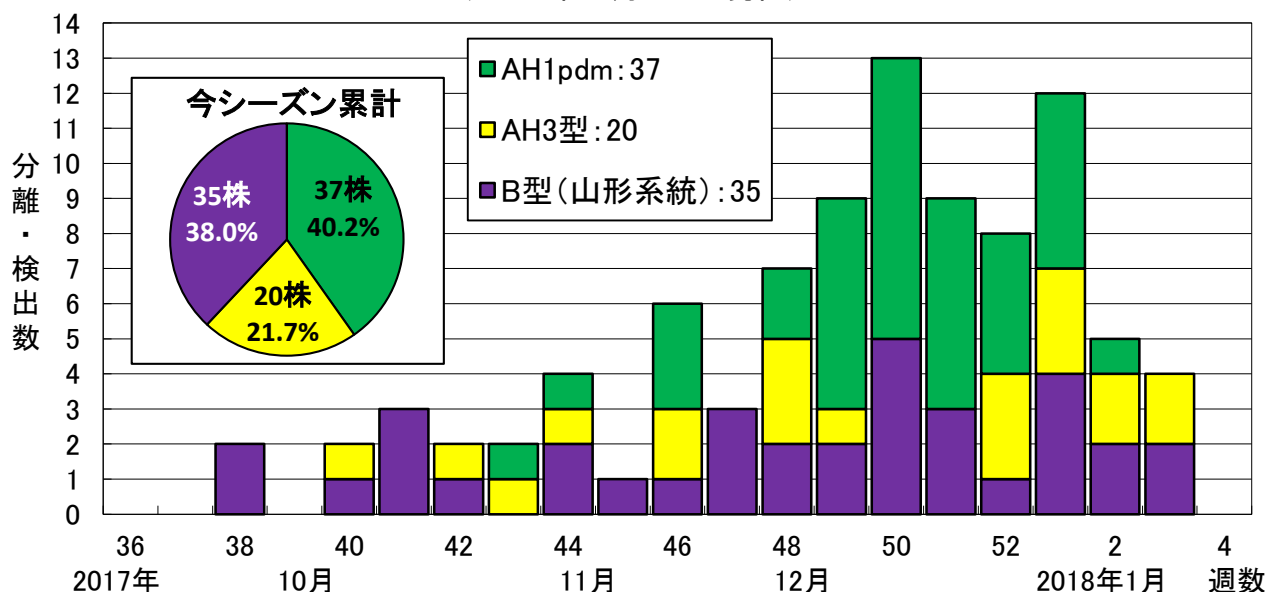
**7 市内病原体検出状況:**市内では病原体定点<sup>※6</sup>からAH1pdm(37株)、AH3(20株)、B(山形系統)(35株)が分離・検出されており、直近では、主にAH1pdmとB(山形系統)が分離・検出されている状況です。なお、Bビクトリア系統は市内にて分離・検出されていません。全国でも、主にAH1pdmとB(山形系統)が分離・検出されています<sup>※7</sup>。

※6 病原体定点:採取した検体を衛生研究所に送付する医療機関で、市内に17か所あります。うち、インフルエンザについては12か所にて採取されています。

※7 [週別インフルエンザウイルス分離・検出報告数\(国立感染症研究所、1月12日作成\)](#)

### 市内病原体定点からのインフルエンザウイルス分離・検出状況

(2018年1月17日現在)



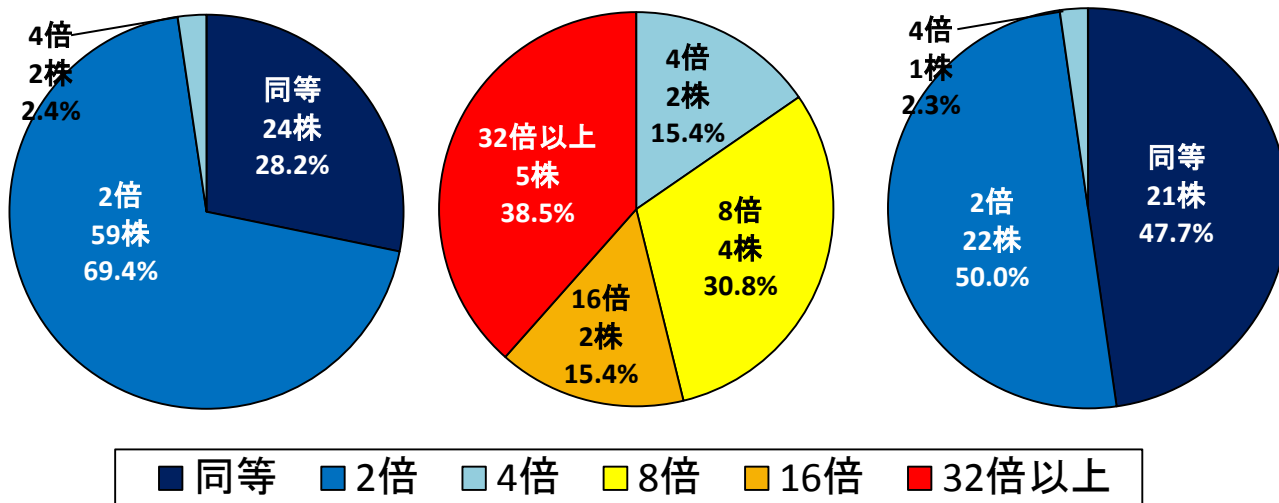
**8 分離株の抗原性解析:**市内で分離された株(細胞培養した 128 株、1 月 10 日現在)のワクチン株との抗原性解析(HI 試験)を実施しました。あくまでもウサギの血清を使っているため参考値ですが、ワクチン類似とされているのは 4 倍以内です。AH3(13 株)は、2 株が 4 倍でしたが、11 株は 8 倍以上であり、ワクチン株と類似しているとは言えず、国立感染症研究所の結果<sup>※8</sup>と矛盾しないと考えられます。AH1pdm(85 株)と B 山形系統(44 株)は、すべて 4 倍以内となっています。

(参考値)市内で分離された株の抗原性解析

AH1pdm 抗原性解析(85 株)

AH3 抗原性解析(13 株)

B 山形系統抗原性解析(44 株)



国立感染症研究所では、流行株とワクチン株の抗原性を比較する目的で、フェレット感染血清を用いた赤血球凝集阻止(HI)試験または中和試験による抗原性解析を実施しています。

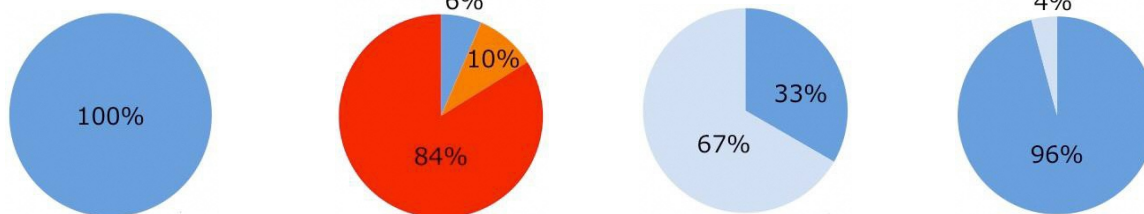
その結果、AH1pdm、B(ビクトリア系統)、B(山形系統)の流行株は、「国内のワクチン製造株と抗原性が類似していた」としてはいますが、AH3 では、9 割以上の流行株において、「国内のワクチン製造株に対する抗血清との反応性の低下が認められており、ワクチン抗原と流行株の抗原性の相違が推定される。これは、ワクチン原株が鶏卵での増殖能を獲得する過程において、抗原性の変化を伴う変異を獲得したことに起因している」としてはいます。

AH1pdm(43 株)

AH3(31 株)

B ビクトリア系統(3 株)

B 山形系統(24 株)



(国立感染症研究所ホームページ<sup>※8</sup>より)

※8 [インフルエンザウイルス流行株抗原性解析と遺伝子系統樹 2017 年 12 月 28 日\(国立感染症研究所\)](#)

※参考リンク 近隣自治体の流行状況 ○[神奈川県](#) ○[川崎市](#) ○[東京都](#)  
 全国の流行状況 ○[国立感染症研究所](#)

【お問い合わせ先】 横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課 TEL 045(370)9237  
 横浜市健康福祉局健康安全課 TEL 045(671)2445